

## は　じ　め　に

横浜市は、開港以来の歴史的経緯の中で、埋立てや港湾建設による臨海地域の開発を進めてきた。国内第一の貿易港、国内有数の工業地域、そして人口三百万人を数えるに至った大都市もこの礎のう上に築かれたものである。

このことは反面、臨海部の海岸線は殆ど岸壁や堤防として人工海岸化され、間近で目に触れ、直接、水とたわむれ、そして水産物を自然の幸として享受することのできる身近な生活環境としての海を市民生活の中から失うことにもなった。

平潟湾・金沢湾は、このような親水環境としての海が残された、横浜市民にとって貴重な水域といえよう。

しかし、この水域のうち、特に平潟湾では、年々水質の汚濁が進み、市民の享受すべき自然の恩恵が少なからず損われるようになった。汚濁した水面、腐敗臭、魚介類のへい死、生物の種類減少や異常増殖……、こういった事態の周辺への拡大を防ぎ、改善を図ることが早急に求められている。

本報告書は、汚濁の実態を把握し、水域の環境改善対策の資料とするため、昭和57年から同59年にかけて実施した、平潟湾、金沢湾および流入河川における、水質、底質、生物に関する調査の結果をまとめたものである。

また、あわせて既存の文献に基づき、平潟湾の浄化対策についての一般的な考察も試みた。

調査の一部、平潟湾、金沢湾の底生動物相については、東京大学農学部へ委託した。現地調査は東京大学農学部と横浜市公害研究所が合同で実施している。

金沢湾の調査を実施するに際して横浜市港湾局海務部に多大な協力を得たことをここに深謝する。

昭和61年3月

横浜市公害研究所長　宮　腰　繁　樹

本報告書の調査ならびに執筆担当者は以下の通りである。

1. 東京大学農学部

桑原 連 (水産海洋学教室)

2. 横浜市公害研究所

畠中 潤一郎 (水質部門)

二宮 勝幸 ( " )

福嶋 悟 ( " )

斎藤 克夫 ( " )